

# 2024年度 とうきょうすくわくプログラム活動報告書

社会福祉法人稲城福社会 向陽台保育園

## 1. 活動のテーマ

<テーマ>

様々な積み木を使つての構造あそびの広がり

<テーマの設定理由>

積み木は各年齢・クラスに設置されており、積むあそびは以前からおこなっていたが、構造あそびとしては盛り上がりず、構造自体も平面展開が多いことから、どのように子どもたちに興味関心を持ってもらうかを検討してきました。広いホールのスペースを開放することで、子どもたちの構造あそびへの意欲が湧いてきたことをきっかけに、もっと積み木のあそびを深めてもらいたいと考え、今年度のテーマにしました。

## 2. 活動スケジュール

1 月中 各クラスに様々な種類の積み木に触れ合う

2 月初旬 大人と一緒にあそびながら、積み木の積み方を知らせていく 積み木作品の写真を掲示する「これってどうやってつくるのかな？」 それによって子どもたちの作品が変わっていくか

2 月中旬 こどものとも社 平井さんに『積み木の先生』として来所していただき、ホールに各クラスの積み木を持ち寄り、大きなものを一緒に作ってみよう 作ったものはどうするか、子どもたちと相談して決める (年中・年長対象)

2 月下旬 各クラスで作品を作ってみよう 作品の例をクラスに掲示 子どもたちの中からアイデアが出るか?

3 月上旬 実行から3か月近くを経て、子どもたちのあそび方は変わったか?

## 3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

カプラ1000 カーブ積み木 ジグザグ積み木 半球積み木 ジーナボーン アングーラ  
ハニカム 木箱 園用ウールレンガ積み木セット ネフスピール リグノ

## 4. 探究活動の実践

<活動の内容><活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり>

以前、他園を見学した折に見た、子どもたちが生き生きと構造あそびに取り組む姿や、複雑な形状の構造物を協力し合つて作り上げる姿に、幼児担当職員が大変衝撃を受け、ぜひ我が園でもそのような保育がしたいと考えていました。しかし、他園で備えているような様々な種類の積み木は自園にはなく、また、所有している積み木も数が少なく満足いくまで作り込むことができず、職員の積み木あそびの知識もそれほどないために子どもたちの興味を引き出すこともできていませんでした。そこで、今年度のすくわくプログラムでの補助金を子どもたちの構造あそびの広がりのために使用したいと要望を出し、園の承諾を得て、構造あそびの探究をテーマにすることになりました。

しかし、当初、新規購入したカーブ積み木・ジグザグ積み木・半球積み木など、これまで親しんできたウールレンガ積み木とは異なる形状の積み木に、どのようにしてあそべばいいか戸惑う声が職員からも子どもたちからも上がりました。「積み木や道具は、そこにあるだけではあそびは広がっていかない」ということを改めて思い知った瞬間でした。そこで、まずは職員が持っていた「積み木と保育」という本を参考に、積み方・あそび方を職員に知らせていくことにしました。写真を見ることで、積み方や使い方がわかり、職員が見本として実際に積んで見せることで、子どもたちも次第に真似をして積んでみる姿がみられるようになりました。

最初に盛り上がってきたのはカプラ積みです。以前からクラスにあり、カプラ積み大会（高く積むことを競う）をクラスでもおこなってきたこともあってか、安定感ある平積みでのタワーを数人が協力して作成するようになりました。2000個も使えるカプラが増えたことで、「もっとおおきく！」「もっとたかく！」という子どもたちの意欲が膨らんでいくことを感じました。また、年長・年中を中心に、同じ目的や同じ完成イメージを共有して、協力・協働すること、その楽しさを感じている姿がありました。



少しずつ盛り上がりを見せてきた構造あそび。ここからもう1段階あそびを深めるために、こどものとも社の平井さんに来ていただき、年長児を中心にカプラやウールレンガ積み木、カーブ積み木やジグザグ積み木などを組み合わせた積み方や屋根の作り方を一緒にあそびながら教えていただきました。少しずつ内側にずらして積むことで、円柱が狭まっていき、屋根ができることを教えてもらった子どもたちはびっくり。ま

た、飾り窓のようにカーブ積み木やジグザグ積み木を配置するテクニックを教えようと、すぐに真似する子どもたち。出来上がった4棟のタワーは1週間ほどホールに展示され、年少児や乳児、保護者からも感嘆の声が上がって、製作した子どもたちはとても嬉しそうでした。ここでは、マットを敷くことでその作品の範囲がわかりやすくなることや、基尺が同じものを組み合わせることによってバランスがとりやすく、形が違うものを組み合わせても美しいデザインになることを職員も学びました。



この直後から、子どもたちの積み木に取り組む会話のなかにも、技術的なことが増えてきました。「積み木が曲がらないようにしないと」「普通の積み木（ウールレンガ）がなくなっても、リボンみたいな積み木（カーブ）でも同じ大きさだから積んでいいよ」「上にあんまり重いものを載せない方がいいね」等、平井さんから学んだこと、実際体験したことを自分なりに解釈し、言葉にしているのだなと感じられました。

1ヶ月が経つ頃には、年長児の真似をして積み方を覚えた年中児・年少児が、個人や2～3人のグループで構造あそびに取り組む姿が見られるようになりました。ハニカムやネフスピール、ジーナボンなどもウールレンガ積み木やカプラに組み合わせて使うテクニックも身に付いてきました。数を数えたり、重さを感じバランスをどうとるかを考えることや、高さを合わせる技術はもちろんですが、出来上がった構造物に人形を合わせたり動物を合わせてあそぶ提案が子どもたちの中から湧き上がってきたことで、ごっこあそびや物語あそびに発展していったり、構造物の美的な感覚を感じたり、単なる構造のあそびにとどまらないあそびになったと感じています。また、時にはうまく作品が作れなくても、壊れてしまっても、「まあいいか、崩れてもまた直せるよ」と年長児が年少児にかけていた言葉を聞くと、積み木の性質の理解や、先を見通せる余裕や自信もあそびの中で培われてきているようです。今後その自信が様々な場面で生かされていくといいなと思います。



## 5. 振り返り

<振り返りによって得た職員の気づき>

構造あそびを深めたいと考えたきっかけは、他園見学の際の構造あそびの姿に触発されたことでしたが、構造あそびが子どもたちの興味を引き、広まり、深まっていくには、環境の充実（物的環境・人的環境）が大変重要であることがわかりました。前述のように、積み木をおろしただけでは何も始まらないし、保育者があそびを理解し子どもたちと一緒にあそぶことで、楽しさ・おもしろさを子どもたちに伝えることができ、そこから子どもたちの興味が始まり、探究が始まるのだと感じました。

子どもたちが積み木に夢中になる姿を見ていると、『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』に当てはまる面が多々ありました。充実感を持って自分のやりたいことに向かう「健康な心と体」、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信を持って行動する「自立心」、友だちと関わる中で、互いの思いや考えなどを共有する・共通の目的の実現に向けて考えたり、工夫したり、協力したりする「協同性」、きまりを守る必要性がわかり、自分の気持ちを調整し、友だちと折り合いをつける「道徳性・規範意識の芽生え」、あそびや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動する「社会性」、考えたり、予想したりするなど、多様なかかわりを楽しむ「思考力の芽生え」、数や高さ、長さなどの「数量」や、仲間との「コミュニケーション」、自分の考えを表現する「豊かな感性と表現」…。積み木あそびの奥深さに驚かされました。

今後も、乳児保育から積み木を身近に感じられるよう、保育環境を整備し、保育者自身も学び続け、子どもたちと一緒に取り組んでいきたいと思っています。